



M

K

K

X

テ

イ

カ

## ● 作家紹介

エウリピデス (Euripides 紀元前480年(『エウリピデス伝』『スーダ辞典』による)～紀元前406年)  
ギリシア三大悲劇詩人の一人。

父親ムネサルコスと母親クレイトの間に生まれる。父親は貧しい行商人。母親は市場の野菜売り。

アテナイ市もしくはその近くのサラミス島で生まれたとされる。

はじめは格闘技の選手を目指すのが、のちに精神的世界へ関心を示し、プロタゴラスに修辞学を、ソクラテスに倫理学と哲学を学ぶ。アナクサゴラスへも師事するが、彼の学説が「太陽神アポロンへの不敬」とされ、政治的迫害を受けたのを機に、悲劇作家に転身する。その作風は革新的であり、伝統的な悲劇の世界へ知性と日常性を導入した。作品様式面では「機械仕掛けの神(デウス・エクス・マキナ)」という劇作技法を多用したことが特徴的である。

紀元前408年、マケドニア王アルケラオスに招かれ、都(ペラ)へ赴く。

紀元前406年、マケドニアで客死。

劇壇のライバル・ソポクレスは訃報に接し、丁度競演会の予備行事の場にいたが、喪服に着替えて弔意を表したという。その容貌については「そばかす、濃いあごひげ」との短評あり。

作品は三大悲劇詩人の中で最も多い19編が残存している。

主な作品: 『メデア』『ヒッポリュトス』『エレクトラ』『タウロイ人の地のイビゲネイア』『ヘレネ』『オレステス』『バックス教の信女たち』等

# この胸のうちに燃える怒りの焰、 これこそ人間にとってこの上ない禍のもととなるもの。

MY WRATH IS STRONGER  
EVEN THAN MY THOUGHTS,  
WHICH IS THE CAUSE  
OF THE GREATEST WRONGS  
OF HUMANKIND.

## ● 清流劇場 2018年10月公演『MEDEA メデア』

- 原作: エウリピデス
- 構成・演出: 田中孝弥
- 翻訳・ドラマトウルク: 丹下和彦
- ドラマトウルク: 柏木貴久子

- 出演: 林英世・西田政彦(遊気會)・高口真吾・阿部達雄・泉希衣子  
倉増哲州(南森町グラスホッパーズ)・服部桃子・日永貴子・立花裕介  
藤田和広・大森千裕・東出ますよ

- 音楽・演奏: 仙波宏文
- 特別協力: 森和雄

- 公演日程:  
2018年  
10月17日(水)19時  
10月18日(木)19時  
10月19日(金)19時  
10月20日(土)15時(終演後、アフタートークがあります)  
10月21日(日)15時

※各回、開演7分前より

田中孝弥によりまず《ビフォアトーク》を行います。

※日時指定・自由席です。(一部関係者席を除く)

※小学生以下のお客様はご入場になれません。

\*作品上演中のご入場は制限させていただく場合がございます。

\*会場内での飲食喫煙・写真撮影は禁止です。

◎アフタートーク・パネラ

丹下和彦(大阪市立大学名誉教授・古代ギリシア文学者)

田中孝弥(清流劇場代表)

司会: 岸野令子(映画パブリシスト)

- 会場: 一心寺シアター倶楽  
〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪2-6-13 B1F  
tel: 06-6774-4002  
web: <http://isshinji.net/kura/index.html>

- お問い合わせ:  
清流劇場  
web: <https://seiryu-theater.jp>  
e-mail: [info@seiryu-theater.jp](mailto:info@seiryu-theater.jp)

- メンバー募集  
清流劇場の活動に興味のある方、俳優・スタッフに興味のある方は、劇団までご連絡下さい。

清流劇場ウェブサイトでは、過去の作品のダイジェスト映像や舞台写真を公開しております。是非、ご覧下さい。

### お知らせ

- 上演時間について。  
途中休憩(約20分)を含め、約2時間20分を予定しております。  
(実質の上演時間は約2時間です。)

- 11月13日(火)より、  
「清流劇場・ギリシア劇勉強会2018」の後期が始まります。  
詳しくは折り込みチラシをご覧ください。

## ご挨拶

今、メディアは怒っている。

夫イアソンは、苦勞をともにしてきたメディアに離縁を言い渡し、王家の娘と結婚してしまったからである。しかも二人の間には子供が二人居る。メディアが怒りたくなるのは当たり前だ。イアソンもそれは分かっている。

イアソン (……) 女房たるもの、おのれの亭主によその女を押しつけられれば

いくらなんでも怒り出すのがあたりまえだ。(909-910行)

と、自分でも言っているくらいなのだから。

しかし、メディアが怒っているのは、よその女と結婚し、捨てられたことだけが原因ではない。

メディア 本当の肚(はら)はそうではありますまい。いいえ、蛮人の娘と結婚したことが

年齢(とし)をとるにつれて、世間体の悪いものに思えてきたのです。(591-592行)

メディアは、黒海東岸のコルクスという所の生まれ。今で言うジョージア(グルジア)という国である。当時の世界に思いを馳せてみれば、イアソンの生まれ育ったイオルコスは、ギリシアの一都市国家。先進国、世界の中心である。

一方、コルクスは、ギリシアから見れば、地の果て。田舎、未開の国。どんな野蛮人がいるのか分からない、といった具合。イアソンの言葉の端々にも、ギリシア讚美が伺える。

これは実際の当時のギリシア人も同様で、自分たちのことをヘレネスと呼び、異邦人をバルバロイと呼んで区別していた。そして、バルバロイは無知で無法で愚鈍だと見なしていた。イアソンも今まで色々とメディアに助けて貰ってきたにもかかわらず、やはり、心の底ではコルクス生まれのメディアを蔑視しているのだ。

イアソン しかしそちらだって、わたしを助けたお返しに

与えた以上のものを受け取っているのだぞ。こういうことだ。

まず第一に、おまえはあんな草深い田舎ではなく、このギリシアの地に住んでいる。

そして正義の何たるかを知り、また物事を処理するのに力づくではなく、法を用いることを覚えた。(534-538行)

こう言った一言一言が、メディアの心を深く傷つけ、また怒らせているのだ。

——『メディア』という作品は約2500年前の作品ですが、決して遠い昔の別世界の物語ではありません。単なる男女の愛憎劇でもありません。出自や独自の文化・価値観に対する差別、人間の尊厳の問題も含んだ現代にも通じる作品です。偏狭な心を以て、他者と接し続けることの先にあるのは、双方にとっての悲劇です。メディアは最終的に子供殺しを遂げます。子供殺しの理由はあらすじにも書いてありますので割愛しますが、子供を殺して苦しむのはイアソンだけではありません。メディアも勿論、苦しいのです。メディアも子供を殺すことにためらっていました。

メディア 子供たちも一緒に連れて行こう。

この子らをひどい目に遭わせて父親を苦しめる、

でもその結果、わたし自身がさらにその二倍の苦しみを味わわねばならぬという、そんな法がどこにあらう。

とんでもないこと、あの計画はやめにしよう。(1045-1049行)

最終場、メディアはイアソンを尻目に去って行きますが、その行く末もまた想像に難くないように思われます。

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。ごゆっくりお楽しみくださいませ。

清流劇場 田中孝弥

# わたしにだって、自分がどれほどひどいことを しようとしているか、わかっている。

## I KNOW WELL

## WHAT EVIL I AM ABOUT TO DO.

### □スタッフ

舞台監督：K-Fluss 舞台美術：内山勉 舞台美術アシスタント：新井真紀 照明：岩村原太 照明アシスタント：塩見結莉耶

照明オペ：木内ひとみ 音響：廣瀬義昭(南ティアーアンドクルー) 小道具：濱口美也子 衣装：植田昇明(kasane)

ヘアメイクデザイン：齒染原諭子(High Shock) ヘアメイク：青山智美(High Shock) 振付：東出ますよ

写真：古都栄二(南テス大阪) ビデオ：(株)WAVIC web・制作協力：飯村登史佳 宣伝美術：黒田武志(sandscape)

演出助手・パンフレット本文デザイン：大野亜希

協力：(株)ウォーターマインド・(株)ライタース・カンパニー・イズム・(株)MC企画・(株)舞夢プロ

山形治江・堀内立誓・佐々木治己・川口典成・嶋田邦雄・山下智子・森岡慶介・居原田晃司

提携：一心寺シアター倶楽

制作：永朋 企画：清流劇場

# 『メデシア』 解題 悲劇の後始末

丹下 和彦 (大阪市立大学名誉教授・古代ギリシア文学者)

メデシアは腹を痛めたわが子二人を殺した。なぜか？ 自分を捨ててよその女に走った夫イアソンに復讐するためである。なぜ子供を殺すのか？ 男親には子供の喪失が最大の痛手となると知ったからである。では女親には痛手ではないのか？ そんなはずはない。それでも彼女は子供を殺す。それは「テューモス(怒り、激情)のせいだ」と彼女自ら言う。どういうことか？

メデシアの故郷は黒海東岸のアジアに近い地域の小国コルキスである。父王アイエテスは宝物「金羊皮(金色に輝く羊の毛皮)」を保持している。それを奪取しようと遙々ギリシアから若い王子イアソンが到来する。彼を見てたちまち恋の虜になったメデシアはイアソンの金羊皮奪取を手助けし、その代わり自分との結婚とギリシアへの同行を承知させる。

金羊皮獲得という成果を上げて凱旋したイアソンだったが、しかし故国では期待していた地位は得られず、失意のうちに故国を出奔しコリントスへ流れ着く。メデシアも二人の子供を抱え、貧乏亭主イアソンに同道する。しかし草深い田舎育ちのメデシアは文明の地ギリシアの社会にはなかなか馴染めない。

そうこうするうちに流れ者の夫婦に離婚話が始まる。イアソンが新しいパートナーと新しい生活手段を手に入れたからである。新しいパートナーは土地の王クレオンの娘クレウサである。離縁されたメデシアにはコリントスからの追放刑も科される。どこへ行こうか？ 家族の反対を押し切って故郷を捨てたメデシアには帰るところがない。また見知らぬ土地ギリシアには寄る辺もない。不安と絶望、加えて長年連れ添った夫の裏切りが彼女を怒りに燃え立たせる。復讐するしかない——彼女は決意する。

標的は誰か？ 裏切り男イアソン、夫を奪った女クレウサ、追放刑を科したコリントス王クレオン。皆殺しか？ いや、イアソンは殺さない。生かして苦しめる。そうだ、子供殺した。容易で効果的で、イアソンを徹底的に苦しめることができる。男親は子供に弱い。そのことはクレオン、イアソン、それに世継ぎ問題に悩むアテナイ王アイゲウスの姿から学んだ。

合唱隊の長：ではどうあってもお子たちを殺そうと？

メデシア：夫を苦しめるにはそうするのがいちばん。

合唱隊の長：あなただっていちばん惨めな女におなりでしょうに。

メデシア：構いません。(816～819行)

メデシアはイアソンを殺さずに子供たちを殺す。子供を失うのは母親メデシアにも辛い。しかしその辛さを怒りがぶつ飛ばす。イアソンのほうがもっと辛いのだ——そう思ってメデシアは子供を殺す、イアソンに泣いてもらうために。

わたしにだって、自分がどれほどひどいことをしようとしているかぐらいわかっている。/ だけどそれをわたしにやらせようとしているのは、この胸のうちに燃える怒りの焰(ほむら・テューモス)。/ そしてこれこそ人間にとってこの上ない禍の因となるもの。(1078～1080行)

劇の末尾でイアソンは子供を殺したメデシアを詰る、「おまえは牝獅子だ、人間の女ではない」(1342行)と。メデシアは牝獅子ではない。人間の女である。しかしテューモスに襲われて子供殺しを敢行する。文明の地ギリシアの女であっても、なくても、草深い田舎コルキスの女であっても、なくても、テューモスが取り憑けば子供殺しという凄惨な悲劇が出来(しゅったい)する。夫婦生活の破綻がその要因となる。

この芝居は人間生活の中のわずかな破綻、人間関係のわずかな行き違いが原因で起きる悲劇を描いている。母親が子供を殺す。さて、そのあとはどうなるのか？ 作者はそこを書かなかった。いや、書いてはいる、メデシアは泣き言を並べるイアソンを尻目にコリントスを立ち去ると、龍車に乗って空を飛び、アテナイのアイゲウス王の許へ逃げて行く。ああ、作者は芝居の素材となった伝承の中へ逃げ込んで一件落着とした——かに見える。

イアソンは最初から最後まで疎ましく、おぞましく、情けない姿、まさに典型的な男の姿を披瀝した。対するメデシアは、テューモスに取り憑かれ、心ならずも無惨な悲劇を演じる姿を提示した。このあと彼女はアテナイへ逃げて行く。そこで彼女は「末長く幸せな生活を送りました」となるのか「辛い毎日を送りました」となるのか。いずれにせよ子供殺害後のメデシアの心の軌跡を克明に描くことは、されていない。作者はそれを提示していない。

悲劇がどのように出来るか、それはわかった。それがテューモスの仕業だということは、わかった。だがその後始末のほうは何も知らされていない。へそ曲がりの観客はそれを知らうとする。かつても芝居が跳ねたあと、帰途に立ち寄った酒亭でおそらく議論が交わされたろう。現代のわれわれも観劇の印としてそれに拘る、「それは余計なお世話です」と作者に言われようとも。事後のメディアの心の軌跡を思い描くことによって、事前のテューモスに取り憑かれて子供殺しを決心するに至る彼女の心中の葛藤がよりよく理解されると思われるからだ。そしてまた彼女は、自ら事後の己を語ることによって、牝獅子であることから脱却する——そう思われるからだ。

ギリシア悲劇に悲劇的事件の「あと」を描いた作品がないわけではない。父親殺害と母子相姦の当事者オイディプスのその後は『コロノスのオイディプス』で描かれる。父親の仇を討つために母親を殺したオレステスのその後は、アイスキュロス『慈悲の女神たち』やエウリピデス『オレステス』で、不十分ながらも、描かれた。

旧社会が標榜する力の正義に則って母親殺害を敢行したオレステスは、そこから生じた個人的な罪を意識せざるを得ないけれども、残念ながらわれわれはその心理状態の推移を告げる克明な描写を持たない。

メディアの場合、そこに描かれているのはオレステスのような力の正義から法の正義へと転移する社会規範を背景とした上での個人オレステスの意識ではなく、子供殺しというメディアのあくまで個人的な行為の事前事後の意識であり、社会規範とは無関係な個人的見解である。それはきわめて個人的でありながら、また同時にきわめて普遍的でもある。あるはずだ。事後の検証はアクロポリスの麓の酒亭でだけでなく、はるか後世のわたしたちにも、いやわたしたちこそ心してたずさわるべき問題ではないか。

『メディア』初演後450年ほど経ってセネカが、近くは17世紀にコルネイユが、19世紀にグリルバルツァーがメディアの子供殺しを取り上げ、その事後のメディアをそれなりに摸索して描いた。しかしながらとうてい充分だとは思われない。わたしたちは、メディアが空飛ぶ龍の車の中で何を考えたか、アテナイでアイゲウスに事件をどう告げたか、考えてみてもよいのではないか。エウリピデスには続篇を書くことは、もはやできないのだから。

## 丹下先生に聞く Q&A コーナー

Q1：清流劇場で2017年3月に上演した『オイディプス王』にもクレオンという人物が出てきました。

今回の『メディア』に登場するクレオンはコリントスの王様ですが、両者は同一人物なのですか？

A1：前者はオイディプスの妻（母でもある）イオカステの兄弟で、のちにテバイの支配者となる人物です。

後者は本篇で見る如く、コリントスの王。

両者はまったくの別人です。ギリシアの神話伝承の世界ではこのような同名異人の例が少なくないから注意してください。

Q2：この作品『メディア』において、クレオンの娘（イアソンの新しい妻＝名前はクレウサ）はとても重要なキャラクターの一人だと思うのですが登場しません。これにはどういった意図があるのでしょうか？

A2：ギリシア悲劇では一篇に登場する俳優は3人までとされていました。登場人物が3人以上の場合は各俳優が分担して演じていました。その俳優の負担を軽くするためというのが一つ。さらにギリシア悲劇の舞台は一つだけで転換不能でしたから、遠い場所での出来事は「使者」の報告で済ませました。クレウサはその使者の報告の中での登場にとどめて、舞台上には登場させなかったのです。

一番の問題は劇中での役割の軽重です。作者は新旧二組の夫婦を同時に登場させて熾烈な三角関係を演じさせることは、どうやら好まなかったようです。つまりクレウサの存在は、メディアの子供殺しを主題とするこの劇ではそれほど大きな要素とはならなかったのです。



## あらすじ

(物語の前段) ギリシアの町イオルコスの王子イアソンは、伯父ペリアスに篡奪された王位の返還を求める。ペリアスは返還の条件として、黒海東端の地コルキスから金羊皮を奪取してくることを要求する。イアソンはコルキスへ赴き、その地の女王メディアの愛と協力を得て、金羊皮の奪取に成功し、彼女を連れて帰還する。しかし、ペリアスは王位の返還にも応じず、その上、イアソンの留守中、彼の両親を殺害していた。イアソンはメディアの力を借りて、ペリアスを殺す。ところが、これが市民の反感を買い、イアソンとメディアは子供たちを連れて、国外亡命を余儀なくさせられ、コリントスに流れてくる。

(物語の本編) 舞台はコリントス。イアソンは、メディアという苦勞をともしてきた妻がありながら、これを裏切ってコリントスの女王クレウサと結婚する。コリントス王クレオンは、メディアの聡明さと魔術を用いる力を知っており、彼女から夫を奪い取った娘の身を案じる。そして、メディアとその子供たちへ、今すぐ国外退去するように命じる。

メディアは「子供たちをどうするか、考えるため一日の猶予を」と嘆願し、許可を得る。しかしそれは、復讐を実行するための時間稼ぎだった。メディアはイアソン(元夫)とクレウサ(新しい妻)、クレオン(その父親)の殺害を計画する。

とはいえ、メディアは、復讐計画を実行した後に、自分の身柄を保護してくれる受け入れ先を確保しなければならない。彼女は逃亡先が決まるまで、計画の着手を待つことにする。

そこにアテナイ王アイゲウスが訪れる。メディアは彼に自らの窮状を訴え、助力を乞う。世継ぎが生まれず、悩んでいたアイゲウスは「子宝に恵まれる薬草を教えること」を条件に、メディアの受け入れを承諾する。逃亡先を確保したメディアは、いよいよ復讐へと動き始める。メディアはまず、毒を塗った薄絹の長布(うちかけ)と黄金の冠を用いて、クレオンとクレウサを殺害する。そしてイアソン殺害については、計画を変更し、彼との間にもうけた我が子二人の殺害を思い立つ。

クレオン「子供を別にすれば、わしだって祖国が一番大切だと思っている。」(329行)

イアソン「子供たちを我が家にもふさわしい形で育て上げたい。」(562行)

また世継ぎ誕生を渴望するアイゲウスの言葉を聞くうちに、メディアは、ひと思いに手を下してイアソンを殺すよりも、子供を殺し、イアソンに生きながら子無しの人生を送らせる方が、より一層苦しめられると悟ったのだ。

メディアはいよいよ子供殺しに臨むも、子供かわいさに決心が鈍る。悩んだ末、やはり復讐心を捨てきれず、子供殺しを実行する。惨劇の後、王座も新しい妻も子供も失い悲嘆に暮れるイアソンを尻目に、メディアは、アテナイの地へと去っていく。



# 人物相関図・出演者紹介

音楽 / 演奏



仙波 宏文

戦士



東出ますよ

合唱隊 (コリントスの女たち)



泉 希衣子



大森 千裕

クレオン



高口 真吾

(王の館からの) 使いの者



立花 裕介

館内の様子を伝える

合唱隊の長



日永 貴子



服部 桃子

コリントス王

親子

新しい妻 (クレウサ)



コリントスの王女

イアソン



西田 政彦

元イオルコスの王子

メディア



林 英世

元コルクスの王女

アイゲウス



高増 哲州

アテナイ王

夫婦

裏切り

元夫婦

支える

世継の悩みを相談する

行く末を案じている

守役



藤田 和広

兄



声：服部 桃子

子供たち

弟



声：泉 希衣子

メディアの従者



阿部 達雄





SEIRYU THEATER  
清流劇場

<https://seiryu-theater.jp>



平成30年度(第73回)文化庁芸術祭参加公演

芸術文化振興基金助成事業